

ON A WIND FROM THE SOUTH
The First European Impact on Japanese Culture

(南蛮文化－日本と西洋の最初の出会い)

○企画・制作 国際交流基金(The Japan Foundation)

○製作 俳映画社

○16ミリ、カラー、29分

○スタッフ 製作 村山英治・福岡順子

脚本・演出 藤原知子

撮影 植松永吉

音楽 吉川和夫

解説 パトリック・チェンバース

1543年の夏、九州南方洋上の種子島に3人のポルトガル人が漂着した。これが日本と西欧の最初の出会いであり、以後、ポルトガル、スペイン、イタリア人などが、貿易やキリスト教の布教に来日するきっかけとなった。日本人は、彼らを南方から来た異民族「南蛮人」と呼んだが、この時彼らによってはじめて伝えられた鉄砲は、日本歴史の方向を決定することになった。即ち、その力を組織的に使った織田信長が天下を平定、室町幕府に替る新しい時代を準備したからである。鉄砲伝来から6年後には、フランシスコ・ザビエルが来日、日本にはじめてキリスト教を伝えた。4人の少年使節がローマに派遣され、ローマ教皇に拝謁したのも、この時代である。

1570年頃からはポルトガル船が定期的に長崎に来航し、日本の銀と中国の絹との仲介貿易を行ったが、同時に西欧や東南アジアの文物が日本に流入「南蛮ブーム」がおこった。17世紀に入るとキリスト教の弾圧が始まって日本は鎖国の道を辿り、このブームは急激に終りを迎えるが、珍しい南蛮風俗を描いた屏風や、南蛮文物をデザインした工芸品などが今日までのこされている。

この映画は、日本が、初めて出会った西欧文化をどのように受け入れ、それが、当時の日本人にどんな影響を与えたかを、のこされた「南蛮屏風」や美術、工芸品などを通じて描き出したものである。長い鎖国の間にその痕跡はうすくなってしまったが、日本歴史を通じ最も華やかで開放的だったこの時代精神の中に、エキゾティシズムの影響を見のがすことはできないであろう。

又、天ぷら、カステラ、といった食べ物や、じゅばん、ボタンなど、今日使われていることばの中に、当時の外来語の痕跡を見出すこともできる。

華やかで、しかも劇的に幕を閉じてしまったことで、今日、日本人に、一種の憧憬の念を抱かせる時代ともなっているのである。